

特集 第1部

東京藝術大学と 地域連携

地域への貢献や連携の取り組みが、全国の大学にとって大きな課題となっている。
東京上野で育まれた東京藝術大学も、近年は取手、千住、横浜にキャンパスを設けて
さまざまな取り組みを始めている。町とともに歩む、新しい連携の形。

〔特別鼎談〕

（参加者）

六角鬼丈

美術学部長

川井 學

音楽学部長

藤幡正樹

大学院映像研究科長





六角鬼丈（ろっかく・きじょう）

美術学部長 教授—建築科（建築設計研究室）

1941年東京都生まれ。

1965年東京藝術大学美術学部建築科卒業。

同年、磯崎新アトリエ入社（～'69）。1984年（株）六角鬼丈計画工房開設。

1991年～東京藝術大学美術学部建築科教授。2000年～中国清華大学美術学院客員教授。

2004年～東京藝術大学美術学部長。

1979年第四回吉田五十八賞「雑創の森学園」、1991年日本建築学会賞「東京武道館」、1996年中部建築賞「富山県立山博物館」まんだら遊苑」、1998年木材利用推進中央協議会会長賞「岩出山保育所」、2001年毎日芸術賞「感覚ミュージアム」、同年日本建設業協会賞「東京藝術大学大学美術館」を受賞。

上野という立地条件

司会 この度は特別鼎談といたしまして、六角鬼丈美術学部長、川井學音楽学部長、藤幡正樹大学院映像研究科長にお集まりいただきました。

本日は三人の鼎談をとおして、東京藝術大学と地域とのかかわりについて語っていただきたいと思います。初めに六角美術学部長からお願いいたします。

六角 東京藝術大学の地域連携としましては、現在「上野タウンアートミュージアム」でお付き合いただいております台東区との連携があげられます。以前から連携はあったのですが、大きなプロジェクトを組んで、しっかり取り組んでいこうというのは今年度（二〇〇七年）からだと思っています。

もともと美術学部も音楽学部も個別に地域連携を行っていたのですが、今回は教員

も学生も活動する場を広げて、町全体を環境的に美術館化していく「芸術運動」みたいなことができたという試みです。岡倉天心作のオペラ「白狐」も台東区の助成で行うことができましたし、今年は八プロジェクトくらいが実現すると思っています。もちろん取手市とも行っていますし、そんな取り組みが、さまざまな地域で始まっています。

もとをたどれば美術学校と音楽学校が創立された時代に遡ることですが、東京美術学校、東京音楽学校と帝室博物館（現在の東京国立博物館）を岡倉天心たち文部官僚が立ち上げていきました。そういうことが根っことなって上野の山が芸術文化ゾーンとして位置づけられてきました。当時この周辺には美術の素材を扱ったり加工したり

する工房があり、教員たちもこの界隈に住んでいたそうです。つまり国家政策として「芸術の殿堂」のような場所を上野に設け、教育の核にしようと目論んだのだと思います。

天心以降はそういった地域との結びつきがどんどん拡散し希薄になっていくのですが、藝大が幸いだったのは、大学美術館や新しい音楽堂ができて、外部の人たちが藝大に来てくれるようになったことです。そこから新しい動きが生まれてくるのではないかと期待感につながっています。

川井 音楽取調掛が本郷から上野公園東四軒寺跡に移転したのが一八八五年です。音楽取調掛は一八八七年に東京音楽学校と改称され、一八九〇年に現在新音楽堂がある場所に移転しました。

立地条件を考えると、まず音楽は演奏者と聴衆が時間と空間を共有してはじめて成立する都市型の芸術であることが前提になると思います。上野では東京音楽学校の東四軒寺跡からの移設と同時に日本最初のコンサートホールである音楽堂も完成し、六角先生のお話にもあったように、周辺も国策に沿って芸術文化ゾーンとして整備された結果、時間と空間の共有という「都市型芸術」の条件も満たされ、「上野」や「音楽学校」が近代日本の音楽文化の代名詞のように言われるまでになりました。以来今日まで、そうした恵まれた条件下でやってくることでできたと思います。

音楽学部の地域連携について言えば、大きな転機になったのはこの東京音楽学校奏楽堂の移築問題です。一九七九年ころに奏

楽堂の愛知県犬山市の明治村への移築の話が持ち上がり、一九八〇年にはそれに対抗して「音楽堂を守る会」ができるなど、さまざまな経緯があった末に台東区が引き受けてくれることになり、一九八七年に上野公園の現在の場所への移築が実現しました。これを契機にそれまであまり密接とは言えなかった藝大と台東区との間で積極的な文化交流が図られるようになり、両者の本格的な連携が始まりました。

六角 地域連携の取り組みとして東京都が主導している「TASK」というプロジェクトもあります。これは台東（T）、荒川（A）、墨田（S）、葛飾（K）の四つの区で、伝統的な工芸活動をしている人たちと藝大の工芸科が交流を始めたものです。現在まで展覧会や講演会をやるなど連続的に活動しています。版画の方でも、葛飾北斎が墨田区の本所で生まれたこともあって刷り師が多いということで、今回のタウンアートのなかでも地元の人たちと一緒に企画したものもあり、市民を集めたワークショップも開始しています。

取手・千住における取り組み

藤幡 取手市に先端芸術表現科ができたのは一九九九年です。創設時からタウンアートという形で、町の中にいろいろな美術品を置いていくことができないかということ、いくつか実現したものもあります。

最初は、教員が五人と先端芸術表現科の一年生しかない状態で、「取手アートプロジェクト（TAP）」の第一回目を実施し

たのですが、そのときは学生たちが書いたプロポーザル（企画書）を選考してから、町の人たちと一緒に街角に設置するというのをやりました。田んぼの中にならったオブジェを立てる学生もいたので、そこでこれまでの藝大とは違う人が来たのだというイメージができたのではないのでしょうか。藝大といえば伝統工芸から始まり、西欧の文化的背景をベースにした美術が上野にある、その延長が取手に来たという印象だったと思うのです。けれども先端芸術表現科がビデオや写真といった新しいメディアを取り込んでいくという学科だったので、町の人たちが期待するものとの間にちよつとしたずれがあつて、その調整に三、四年かかっていると思いますね。

もともと先端芸術表現科の構想の中にはコミュニティアートやパブリックアートがありました。パブリックアートを、日本では駅前の彫刻みたいなものとイメージしかねないですが、例えば公園のデザインもパブリックアートや環境芸術として考えていくことができます。先端芸術表現科は、学校と町との関係のなかでこうした問題を模索していく場になっています。地域と芸術をテーマにしたシンポジウムなどをやりながら、同時に使われていない建物に作家を呼んできて作り変えるなど、非常におもしろいアクティビティーが生まれています。空き家をアーティストに提供して自由に使用せたい、という話を取手市に申し出たら候補になる空き家がいっぱい出てきたんですよ。

六角 上野というのはそれなりの地位がで

きてしまっています。そこで町の住民や行政機関である台東区も、これだけ美術館が区内にあるのだから、あえていろいろなことをしなくてもいいと思っています。またもう一つの文化として下町文化の中心である浅草も持っているのです。煽る必要を感じないみたいなのです。でもそこに、さらに輪をかけようと藝大はしている。取手の場合は、全く火のないところに時間をかけて町を盛り上げたわけですが、そこで獲得した市民権は上野と違う強さがあると思います。

川井 音楽環境創造科が取手キャンパスに開設されたのは二〇〇二年のことです。音楽学部にとっては約半世紀ぶりの学科設置だったのですが、その拠点となるスペースが上野にはありませんでした。音楽環境創造科は、創作や演奏を中心とする学科ではなく、学生が横断的に学習する分野として音楽・音響、文化政策を含むアートマネジメント、身体表現、映像表現の四つの系を置き、さらにそれらを支えるいわばインフラにあたるものとしてコミュニケーション技術の系を配するという構想で出発しました。ところが、取手でも固有の施設を持つことができずに間借り状態を余儀なくされた上に、先ほどお話ししたように音楽は都市型芸術であることから受けざるを得ない立地上の制約もあつて、思うように活動していくことが難しいという悩みを抱えてきました。

上野と取手ではキャンパス間での授業の共有もできないなか、打開の契機を模索していた折に千住キャンパスの話がもたらさ

れました。千住なら音楽活動の拠点としての条件が満たされますし、上野との行き来も容易なので学生は一日のうちにふたつのキャンパスで授業を受けることもできます。

足立区との協議の結果、区が相当な額の予算を投下してキャンパスを整備し、その中に国内有数の録音スタジオや、身体表現の実習にも対応したホールもできるなど施設・設備は格段に充実しました。足立区には二〇〇三年ころに提唱された「文化芸術振興基本構想」があり、これは藝大の誘致が決まった二〇〇五年に条例化されましたが、そうした区の理念や構想と呼応し合いながら、北千住駅前の丸井ビルの中にある「シアター1010」、キャンパス近くにある芸術センタービル内の「天空劇場」、少し離れています「西新井文化ホール」といった近隣施設と藝大の活動を有機的に結びつつ展開を図ることから足立区との連携事業は開始されました。

地域連携とマネジメント

藤幡 もともと藝大は個別指導で作家を育てていくということが教育の中心でしたから、いずれは学生同士がライバルになっていく可能性があるわけです。そこがコラボラティブ（協力的）な教育環境と違うところだと思うのです。ところが、地域連携で入ってくる予算を特定の学生のために使うというのではおかしいわけですよ。やはり何らかのコラボラティブなプロジェクトが必要です。しかし、そのマネジメントは、大変なことです。マネジメントという概念が、これまでの藝大にはほとんどなかったわけですから。先端芸術表現科では、かなり模索が続きました。横浜の大学院映像研究科でしたら映画のプロデュースを手がけてこられた堀越（謙三）先生がいるので、形にしやすい。それ以外のところでは外部



川井 學（かわい・まなぶ）

音楽学部長 教授—作曲科

1944年茨城県生まれ。

1967 東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。1972年東京藝術大学大学院修士課程修了。

1984～87年桐朋学園大学助教授。1988～92年桐朋学園大学教授。1993～99年東京藝術大学助教授。2000年～東京藝術大学教授。

2003年～東京藝術大学音楽学部長。

専門は作曲・音楽理論(和声・対位法・楽曲分析)。作品に『ピアノとオーケストラのためのオード』など、研究業績に『アナリーゼの試みⅠ・Ⅱ』、『四音構造の考察』などがある。

の力に頼るしかないわけなのです。

川井 音楽学部的外部との連携では、マネジメントを教育研究のテーマのひとつとしている音楽環境創造科や大学院の応用音楽学専攻が有効に機能することになりましたが、音楽学部にはもうひとつ連携事業の実施にあたって有力な備えがありました。以前から音楽学部では、演奏の依頼を受けて教員・学生を外部に派遣してきました。これを依頼演奏と呼んでおり、年間百七十件ほどを扱っています。依頼は自治体からのものが多いのですが、企業や公的機関、学校などからのものもあります。音楽学部や演奏芸術センターは、この依頼演奏受託の豊富な経験によって、学内の人材や蓄積してきたコンサート・レパトリーなどのリソースを活用するノウハウ、つまりマネジメントの方法論を身につけてきたと言えます。依頼演奏の委託料は演奏者の報酬や楽器の運搬費などにあてられ、大学の収入にはなりません。依頼を受託事業または受託研究として受ければ、大学にも間接経費として何が入ることになります。足立区との連携事業はこの受託研究の形をとっており、千住キャンパス内に「アートリエゾンセンター」と称する組織を作ったその実施にあたっていますが、ここでは依頼演奏の経験によって培われたノウハウやスキームが活かされています。

なお、足立区側は千住キャンパス全体を「足立区リエゾンセンター」と呼び、藝大と足立区との連携の拠点として位置付けています。

藤幡 藝大は音楽取調掛、図画取調掛の時

代からの役割として、西欧の文化を取りこんで、美術業界、音楽業界を育てていくことで、教員や学生もそこに密着して進化してきたと思うのです。だから業界と学校が結構パラレル（並行）に動いていった。音楽で言えば、奏楽堂ができて西洋の音楽に触れられる場ができると、そこから音楽に関する産業界も同時に生まれていく。レコード産業も生まれたりするわけですし、例えば新しいホールができて人が必要になると、藝大の卒業生がかかわっていくという形があったと思うのです。

映像に関しては映画業界の方がとくに先に進んでいるわけで、そういう関係性が大学と業界の間には存在しないまま、現在までできてしまった。ところが近年では、業界のテンションが落ちてきて、学校をつくる力もないし、あまり教育に興味も示さない。しかし業界との関係性というのをつけないかぎり、藝大を出た学生たちには何のコネクションもないんですよ。そういう意味では新しい歴史をつくる必要があるし、横浜で独自の新しいコミュニティをつくることが重要だと思うのです。

卒業生たちに言っているのは、横浜で会社を起こせということです。横浜市には、事業所に関する諸費用などの基盤をサポートするシステムがあつて、それを利用することができます。そういった卒業生たちが学校の周りにいてくれないと映像やアニメーションという学科はやがて行き詰ると思うのです。将来は、業界から教育のために来ていただいた人材に代わって、藝大で学んだ卒業生が次世代のための教育を手伝い

ながら、どのようにコミュニティを作り上げていくことができるのか。映像業界ともうまく関係性を保ちながら、お互いに新しいものをつくらうという雰囲気醸成しなければいけないと思います。

二〇〇七年十二月に三日間にわたって開催した「ポケット・フィルム・フェスティバル」は、映像研究科メディア映像専攻のイベントが中心となって進めたフェスティバルですが、ソフトバンクとシャープのスパンサードによって実現した携帯電話の映画祭です。こういう形で産学連携というのは、工学部系はともかく文化系ではあまり前例がないもので、手探りでやりながら結果的に非常にユニークな場所をつくることのできたと思います。こういうイベントをやってみてわかったことは、新しい携帯のユーザーがどういうふうに携帯を使った方がいいかということ、企業はほとんどケアしないでいるということなのです。ムービー機能をつけてみたけれど、実際にムービーを使うとどんな作品ができるのかについてあまり考えてこなかった。そういう意味でこうしたイベントをアカデミックな場所で開催するのは本当に意味があることなのです。

学外連携の必要性

六角 上野における美術学部と音楽学部の関係で言いますと、ここ数年でまだ行動的に横断型になっていないかもしれませんが、話し合いはできるようになったと思います。先ほど音楽取調掛の話がありましたが、岡倉天心は東京美術学校を立ち上げる前に文部省で音楽取調掛にいたことがあるそうです。そこで東京音楽学校の創設にも力を尽くしたものですから、音楽学部もまんざら天心と関係がないわけではないんですね。旧奏楽堂を残すために尽力したのも建築科の前野まさる先生でした。前野さんは文化財保護や町並み保存に取り組み、谷中をはじめ日本全国の町づくりに功績があった方です。

建築家というのは建物を建てることで、その地域の環境形成や街づくりと何らかの関係が出てきます。大きな都市計画までいなくても、地域活動をする人もいます。ただ、公共事業の発注は妙な公平性があつて、同じ建築家が同じ地区で続けて仕事をすることがなかなかできません。とはいえ、建物を一つつくるのに何年もかかりますから、その間にその町には愛着もわくし、研究対象を見つけて、より深く付き合っていくのは当たり前のことですが、仕事としては、たいいていできた途端に関係も終わってしまうことが多いのです。でも取手市のように藝大のキャンパスが設置され、市と芸術的な活動で結びつきが強まって、取手アートプロジェクトのように長期にわたって継続

してくると市と大学が一体的になって、新しい街の姿を創り出していけるかもしれない。せん。

川井 上野の両学部間の協力関係といえ、すでにオペラや邦楽の公演などでの共同の実績がありますが、さらに組織的に取り組んでこうした芽を育てていきたいものですね。

音楽学部は足立区では、四つの柱を立てて連携事業を開始しました。一つめは演奏会を主体とする芸術提供、二つめは小中学校を対象とする音楽指導、三つめは音楽療法のノウハウを活かした音楽を通じた社会福祉活動、四つめは文化講座やシンポジウムなどによる一般区民向けの生涯学習プログラムを含む文化芸術活動です。さらに、現時点では具体化に至っていませんが、千住キャンパスを全国の音楽教員のリカレント教育の拠点としていく構想もありました。

初年度を終え、一通りのプログラムを消化した時点で、予算規模や事業内容についての足立区との調整を行いました。連携事業に関する双方の考え方を整理し、平成十九年度からは音楽教育と音楽福祉を中心に置きながら現実的かつ着実に事業を進めるとともに、演奏会の方向性については中長期的な視点でできるだけ全区的な広がりを生み出していけるような文化事業へと育てていけるよう計画を立てていくことになりました。そのようなわけで、これから数年の時間をかけながら区側の要望にこたえつつ大学としての研究を継続・展開していくことになるだろうと考えています。

産業界との関係に触れますと、現在音楽学部には、たとえば美術学部の「TASK」のような産業界と直接的で双方向的な関係を形成する窓口はありませんが、千住キャンパスには国内有数の録音スタジオができたので、そこを活用したソフトの制作・供給や録音に関する技術的・音楽的なノウハウの提供を通じた産業界との連携を模索することが、今後の課題となっています。事実、場所は千住ではありませんが、音楽環境創造科が都心の新しいビルのフロアの音響デザインを請け負うといった、産業界との連携が少しずつですができつつあります。

藤幡 藝大は多くの大学のなかでもいちばん社会と直接的な接点を持っていると思うのです。でもタレントティブな個人芸を主体とした教員が集まっているので、社会とのかわり合いは学外でという事例がほとんどだと思うのです。これからはこうした活動を教育の場ともうまくオーバーラップさせていくことで、非常にいい教育環境が作れると思うのです。



藤幡正樹（ふじはた・まさき）

大学院映像研究科長 教授—大学院映像研究科メディア映像専攻
1956年東京生まれ。
1979年東京藝術大学美術学部デザイン科卒業。1981年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程デザイン専攻修了。
1989～98年慶應義塾大学環境情報学部教授。1998年ZKM映像メディア研究所（カールスルーエ、ドイツ）客員アーティスト。
1999年東京藝術大学美術学部先端芸術表現科教授。
2005年～東京藝術大学大学院映像研究科長。
近年の主な個展等：「不完全さの克服」、CCGA現代グラフィックアートセンター（福島）、「Off-Sense 離常識な世界」、キャノン・ギャラリー（東京）、「Portray the Silhouette」、アート・スペース・キムラ（東京）、「Ars Electronica Festival, Hybrid Art」、OK center（リンツ）、オーストリア、「美麗新世界:当代日本視覚文化」、BTAP（北京）、広東美術館（広東）、中国。2007年ポケットフィルム・フェスティバル実行委員長。

していけるように努力していこうと思っています。

川井 学内の部局を超えた連携を図ることによって、外部との連携の可能性も広がると思います。藝大の三つの組織の協同を促す取り組みが考えられるべきでしょうね。

これからの音楽学部の連携事業の推進にあたっては、人が特定の時間に現場に向向いていかなければならない、という人的リソースの活用にとってはしばしばネックとなる条件を、学生については事業への参加を履修プログラムに組み込む、教員については研究や社会貢献の実績として評価していくなどの方策を講じて克服していく工夫が求められていると思います。それには、単に教育研究活動と連携活動との両立を図るだけでなく、それらを高い水準を維持しながら有機的に結びつけていく発想を持つことが必要だろうと考えています。

六角 私もそう思います。美術学部では、大型の地域連携事業である「上野タウンアートミュージアム」がはじまりましたが、これは、大学院の教育研究のプログラムとして位置づけていることが大きな特徴なのです。藝大は作家育成を基盤にしてきたので、学生は個人的な創作力や技能を発揮することに長けていても、共同制作や社会活動があまり得意ではありません。というように、学内では機会がなく慣れていないといった方がいいでしょう。これからは学部も横断し、他分野や社会環境とリンクした活動が期待されます。

上野校地

技と工芸感

伝統技術の応用によるイノベーション商品開発プロジェクト発表展

「技と工芸感」は、地域文化の活性化と教育研究活動の地域還元を目的に、本学が今年度から台東区内各地で開催している地域連携事業「上野タウンアートミュージアム」の一環で、区内の伝統工芸職人と、彫金・鍍金を専攻する大学院美術研究科の大学院生らが交流を重ね、制作した作品の発表展。約六五〇〇名が来場した。

下町の歴史の中で育まれ、職人のあいだで鍛え抜かれた伝統的な「技」と、若い工芸家たちの瑞々しい「感性」との出会いがテーマで、台東区伝統工芸振興会の協力を得、昨年の四月から皮革加工や鼈甲、簾、桐箆笥などの職人を大学に招き、技術体験会（ワークショップ）を開いてきた。

カリキュラムに組み込まれたこのプロジェクトを通じて、学生たちは、大学の近くで息づく伝統技



術の数々を改めて発見し、新しい工芸品のためのアイデアを次々と形にしている。例えば、鼈甲に金箔を挟み込み、鉛色に透ける風合いに新たな輝きを加えたジュエリーや、繊細な簾の機能美を身体にまとわせた装飾品、刷毛の中から優しい光を放つ照明器具など、ユニークなものばかり。普段自分たちが扱っている素材や技術とはまったく異質なものでただだけに斬新で意想外な成果が生まれた。

学生のデザインを実現するためには、技術を駆使して新しいものづくりに挑戦できたと語る職人も数多く、このプロジェクトが互いにとって貴重な体験となったことが窺える。

今回は三年計画の一年目。商品開発を視野に入れた取り組みが、来年度以降も引き続き行われる。

取手校地

取手アートプロジェクト



「取手アートプロジェクト」（TAP=Toride Art Projectの略）は、本学取手キャンパスに先端芸術表現科が新設されたことを機に、一九九九年から、全国公募の野外アート展と地域在住作家のアトリエ公開（オープンスタジオ）を主な活動として発足した文化事業。今年度で九回目。

事業の運営には、市民ボランティア、大学教職員・学生、行政が一体となって携わり、県外からのスタッフも加えて、アーティストとともに作品や展覧会を作り上げるプロセスを共有している。

毎年秋に行われるイベントには、放置自転車、利根川河川敷、学生寮跡地、下水の終末処理場など、取手市に関連するユニークなテーマや場所がプロジェクトのモチーフとして設定されてきた。会期中は、市内各所で作品展示やイベントが開催され、取手の街全体が現代アートの空間となり、近年では一万人を超える人出を集めている。

このほか、JR高架下の殺風景な壁面を飾る「壁画プロジェクト」

や市内全小学校が参加して児童画の制作・展示等を行う「児童画展」（子供プログラム）、アートマネージャー育成プログラム「TAP塾」など、さまざまな取り組みが独自の展開を遂げ、茨城県南をはじめ周辺地域も巻き込んだアートによる街づくりが進行中である。

アーティストたちの創作発表活動を支援し、市民に広く芸術とふれあう機会を提供することで、取手市が文化都市として発展していくことを目指しているTAP。

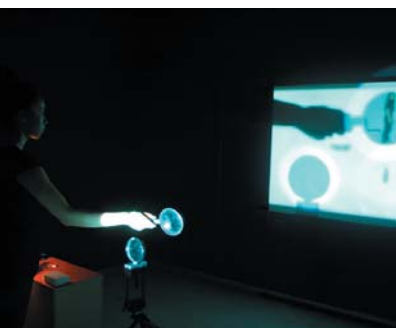
こうした創意と工夫を活かした個性豊かな地域づくりに貢献したことが評価され、「取手アートプロジェクト実行委員会」（取手市）は二〇〇六年十一月、国土交通省「地域づくり表彰」国土交通大臣賞を受賞し、また、市民・大学・行政が一体となって、アートによる新たな街づくりを成功させたことが評価され、二〇〇七年一月には、タカシマヤ文化基金美術団体賞を、同年八月には、「サントリ―地域文化賞」を受賞した。

ヨコハマEIZONE

「ヨコハマEIZONE」は、市民が映像文化に気軽に触れるとともに、国内トップクラスの業界関係者が集まり、映像文化産業における新しいマーケットの可能性などを探る機会として、「映像文化都市づくり」を推進している横浜시가、二〇〇六年より開催しているフェスティバル。

二〇〇五年から開校された大学院映像研究科が、市の呼びかけにより昨年に引き続き、このフェスティバルの一事業として共催し、馬車道校舎と新港校舎にて次のイベントを行った。

馬車道校舎においては、「Open Theater 2007」と題して、鶴屋南北の四谷怪談を現代劇にアレンジした長編「四谷怪談」、田辺聖子の短編落語集を映画化した「ホームスイートホーム」やSFの歴史的名作をリメイクした「SOLARIS」など映画専攻の学生たちが制作した新作映画が上映された。さらに、リクエストの多かった映画専攻第一期生修了制作全六作品も上映。また、映写室や上



映ホールを見学し、映画上映のしぐみを体験するワークショップ「映写室たんけん！」を実施した。

新港校舎では、メディア映像専攻における今学期の制作・研究成果を公開する展覧会「OPEN STUDIO vol.4」が開催され、映像作品や観覧者が実際に手で触れられる体験型の作品などが多数展示され、訪れた人々を楽しませた。

映像文化産業の育成や教育機関の集積を目指す横浜市には、関内地区に進出する映像コンテンツ制作企業・教育機関を募集する「映像コンテンツ制作企業等立地促進助成制度」や創造的活動を目指す学生等の人材集積が図れるよう連携強化を行い、創造都市の担い手育成を促進する「芸術系高等教育機関と連携した担い手育成」などさまざまなサポートシステムがある。本学では、今後もそれらを活用し、お互いに新しいものをつくる雰囲気を醸成するとともに、本学で学んだ学生たちが、横浜市に独自の新しいコミュニティをつくることを模索していく。

子育て支援 おとあそび♪親子教室

音楽学部では千住キャンパスにおける教育研究活動の開始を契機とし、文化芸術振興政策を推進し教育と文化の向上をめざす足立区と連携協定を結び、教育委員会の協力をえながら地域連携事業を実施している。千住キャンパスのアトリエゾンセンターが中心となり、各種演奏会、区立小中学校における音楽指導、福祉活動としての音楽療法、生涯学習講座などを開催しており、「おとあそび♪親子教室」もセンター所属スタッフが、足立区在住の未就学児とその保護者を対象として平成十八年度から継続的に実施している事業である。音楽による親子の関係づくり、音遊びをととした親子のコミュニケーション促進など、音楽を利用した「子育て支援」を目的としており、継続性のある活動として隔週開催六回シリーズで企画されており、これまで三期一二〇組の親子が参加している。



能性をもった楽しい音楽活動」と位置づけて、親が子どもとともに家庭で実践できるように配慮したプログラムとなっている。音楽で遊ぶ方法を伝えるだけでなく、幼い頃から上質な音楽や本物の楽器に触れてもらうこと、音楽療法の技法を応用して子どもの自由な発想や表現を引き出すことなどを特徴としており、未就学児をもつ家庭にとって大変魅力的な文化事業となっている。

また、これと並行して「おとあそび♪親子コンサート」と題した音楽会を半期に一度ずつ実施している。普段接することの少ない上質な生の音楽や本物の響きを小さな子どもたちに体験してもらうことに加え、子どもと大人がともに音楽や楽器を楽しく体験できるような工夫を凝らしたコンサートとなっている。未就学児も参加できる稀少なコンサートとして足立区民からのニーズが非常に高い活動であり、次回第四回目のコンサートへの期待も高まっている。

TOPICS

120周年記念企画トピックス

創立120周年という大きな節目に催された
歴史をたどり、未来を志向する多彩な事業を紹介する。

創立記念日にあたる十月四日、奏楽堂において、東京藝術大学創立一二〇周年記念式典が、三笠宮崇仁親王殿下をはじめ各界から多くの来賓を迎えるなか盛大に挙行された。

宮田亮平学長は、式辞で一二〇年の歴史を振り返り、多くの困難を乗り越え、時に当たった先輩たちの献身的な努力によって、本学は数多くの有為な人材を社会に輩出し、わが国の芸術界で大きな役割を果たしてきたと述べた。

また、国立大学法人化を、むしろ大学がその教育研究活動を積極的に社会へ発信できる好機としてとらえ、藝大らしさを発揮して更なる発展をめざすとともに、教育・研究に加えて大学の第三の使命といわれる社会貢献や国際交流の推進にも積極的に取り組んでいきたいと力強く語った。続いて、渡海紀三朗文部科学大臣

創立一二〇周年 記念式典

(高塩至文化庁次長代読)、甘利明経済産業大臣(細野哲弘製造産業局長代読)、大賀典雄(株)ソニー相談役それぞれからご祝辞を頂戴した。

国内外から寄せられた祝電披露の後、器楽科教員による奏楽「ブランデンブルク協奏曲第五番」(J・S・バッハ)第一楽章が演奏され、会場は、創立一二〇周年を祝賀する雰囲気包まれた。

閉式後には、来賓から、藝大らしい荘厳な式典であったとの声が多く寄せられた。



藝大アーツ・サミット'07

十月四日から十四日まで、本学では日中韓藝術大学交流事業「藝大アーツ・サミット'07」を開催した。これは、日中韓の文化・芸術交流を促進するため、中国および韓国を代表する芸術大学と連携して展覧会、演奏会などを実施するもの。

初日の四日には、中国から六大学、韓国から四大学の学長を招聘して「藝術大学サミット」を開催した。宮田学長と青木保文化庁長官の挨拶の後、十一大学の学長は、「東アジアから藝術を世界に」をテーマに、今後の芸術及び芸術教育の方向性について意見交換を行った。そして、共通のメッセージとして取りまとめた『藝術宣言』に署名し、世界に向けて発信することに合意した。



【参加大学】中央美術学院、中央音楽学院、清華大学美術学院、上海音楽学院、中国美術学院、新疆藝術学院(以上、中国)
ソウル大学校美術大学、ソウル大学校音楽大学、韓国藝術綜合学校、大邱大学校造形藝術大学(以上、韓国)
東京藝術大学

『藝術宣言』
東アジアの悠久の歴史の中で、私たちは多くの文化交流を重ねて来た。現在、日本、中国、韓国を代表する、藝術大学は、それぞれが自国の伝統的な藝術を尊重したうえで、新しい藝術を創出し、世界に向けて発信している。ここに集った十一の藝術大学は、お互いの藝術の展望について話し合い、藝術こそが人間性を豊かにし、藝術文化の交流こそが平和で豊かな国際社会の構築に大きく寄与することを確認した。このような認識に立ち、私たち十一の藝術大学は、国を越えて協力し、次世代の優れた藝術家を育成し、世界の藝術の発展に貢献していくことについて、ここに合意し宣言する。

岡倉天心 ―芸術教育の歩み―

十月四日から十一月十八日まで、大学美術館において「岡倉天心―芸術教育の歩み―」展が開催された。

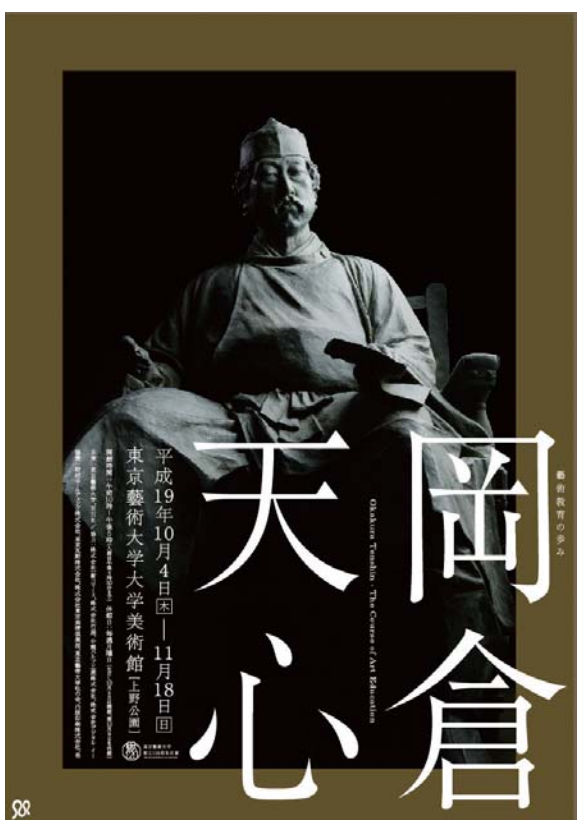
本展は、本学の創設に深くかわり開校まもなく校長となった天心・岡倉覚三の業績を、東京美術学校在任時代を中心にして多角的に検証、紹介したもの。

天心の行った美術に関する仕事は、美術学校での教育環境の整備や学生指導にとどまらず、社会連携を基盤とする依嘱制作の推進、美術団体の支援、美術行政の整備のほか、博物館事業、美術史の編纂、評論、文化財保護など広範囲にわたっている。本展では、天心の本校在任期間で

ある明治二十年代の活動を中心に構成し、その後の仕事についても「芸術教育の歩み」という観点からとらえ直し、天心の遺志をついだ歴代教官や卒業生たちの活動を追いながら、今日の東京藝術大学に引き継がれてきたものに注目した。全五章で構成。

第一章 天心と東京美術学校、第二章 天心の理想、第三章 芸術教育の現場、第四章 芸術と社会、第五章 エピローグ 理想は彼方に

国立大学法人化を経、大学の運営形態が大きく変化している現在、天心から学ぶべきことは少なくない。創立当初における美術教育への熱意と工夫、あるいは社会連携の実例（野外彫刻の制作、模写事業等）、文化財保存への積極的な貢献等は、これからの本学が求められている活動の指標となるものであり、今後の大学の在り方を探っていく一つの契機になった。



藝大茶会

十月初旬、四日間にわたり「藝大茶会」が開催された。これは、「茶の湯」を通して日本の伝統文化を振り返り、芸術教育や芸術表現の新たな道を模索しようと企画されたもの。

正木記念館に設けられた「家元席」では、十月六日に裏千家、七日に遠州茶道宗家、十三日に表千家、十四日武者小路千家が日替わりで懸釜し、歴史的にも類を見ない催しとなった。また、東京国立博物館の応挙館、九条館には「美術倶楽部席」として、京都美術倶楽部（六、七日）と東京美術倶楽部（十三、十四日）が茶席を設け、貴重な茶道具の数々が披露された。陳列館では、教員による創作茶席「五色界」と創作茶道具の展示、藝大茶道部による茶席「藝大席」（六、七、十三、十四日）が設けられた。

代教寄者益田鈍翁の茶会を再現した東京美術倶楽部席とが、茶の湯の奥深さを感じさせた。

「藝大席」…陳列館二階の創作茶席「五色界」では、五人の教員が五行思想の青・赤・黄・白・黒の五色をテーマとし、茶の湯に対する各々の解釈を表現した。それぞれ他学科・他専攻の教員に茶道具制作などを依頼してコラボレーションするなど、領域横断的に結実した五色の茶席が一堂に会した。

陳列館一階には藝大茶道部による立礼席が設けられた。教員の創作による茶杓、茶碗、掛け軸、風炉先屏風などの茶道具のほか、岡倉天心筆になる書「夜」の複製（オリジナルは「岡倉天心―芸術教育の歩み―」展に展示された）が飾られ、五色を統べる紫をテーマカラーに、新旧織り交ぜた藝大色溢れる茶席となった。

「家元席」…橋本雅邦の襖絵や香取秀真の引き手、高村光雲の欄間など歴代教官の作品が豪華に飾る正木記念館の二階広間で各家元が趣向を凝らし、厳かで気品に満ちた競演となった。

「美術倶楽部席」…伝統的で雅味あふれる趣の京都美術倶楽部席と、自由闊達な茶の湯の新世界を開いた近

各日約六〇〇人が訪れ、初日には三笠宮崇仁親王殿下が御成になるなど盛大な催しとなる一方、併せて公開された石膏室や平櫛田中記念室も含め、会場のそここで一期一会の精神が息づく、繊細かつ大胆で、華やかななかにも落ち着きのある、優れて記念的な四日間となった。



学長と語ろうⅡ 奏楽堂トーク&コンサート

十月二十七日、「学長と語ろうⅡ 奏楽堂トーク&コンサート」が、ゲストに放送タレントの永六輔氏を招いて開催された。関東地方に台風が接近するあいにくの天候にもかかわらず、七〇〇人を超える参加者が来場し、約二時間にわたって対談と演奏会を楽しんだ。

会場はユーモアに満ちた永氏の話に冒頭から沸き続け、「藝大の良い評判は聞いたことがない」という言葉には宮田学長も大笑い。以前、永氏の歌に伴奏しなかった藝大教員から「ピアノの八十八鍵の中にあなたの音はない」と指摘されたことを例に挙げ、「多少音ははずれても中村八大さんは適当に合わせて伴奏して

くれた。藝大はドレミファ信仰を止めたほうがよい」と提案。宮田学長も「ドとレの間、レとミの間には無限の音がある。間を美学として感じられる教育が必要だ」と応じた。

話は江戸時代の文化にも及び、職人の心技やものづくりのための素材など、失われていく日本文化の精髓が語られた。なかでも、職人が使う道具を作る職人がいない、和紙を漉く竹籤を削るカンナがないという永氏の話には、宮田学長も印象深い様子で頷いた。

対談に先立ち宮田学長は、卒業式で「命」という字を揮毫した特製パネルを前に、「今ある命を大切にし、家族や教員に感謝して生きてほしい」と学生に向けメッセージを送ったエピソードを披露。これに応えるように、「今ある命は自分だけのものではなく、三六億年前に生命が誕生して以来受け継いできた大切なもの」という永氏の話で対談は締めくくられた。

休憩を挟み、第二部のコンサートで演奏されたのは、邦楽科学生による「江戸囃子」「新内節」と(社)江戸消防記念会第五区木遣り会による「木遣り」。かつて江戸の町に鳴り響いていた賑わいが蘇り、参加者を暫しのタイムスリップに誘った。



日韓映画共同制作

十一月十九日、日韓学生共同制作映画上映および日韓交流シンポジウムが、東京国際フォーラムホールD1に満員の観衆を集めて開かれた。

上映された二作品(吉井和之監督『視』、ビヨン・ビョンジュン監督『消えない』)は、本学大学院映像研究科と韓国映画アカデミーの学生が、互いに相手国に渡って現地の学生と混成チームを組み共同制作したもの。充分な言語コミュニケーションも

ままならないなか、シナリオのテーマ「Love or Misunderstanding(愛と誤解)」を作品の内外で体感し、相互理解を深めた学生たちには、会場から大きな拍手が送られた。また上映後に行われたシンポジウムでも、李鳳宇氏(シネカノン代表取締役)から「芸術大学が作る芸術作品を見るつもりで来たが、商品として完成されている、予想以上に高い水準の映画で驚いた」との賛辞を受けた。

シンポジウムで司会を務めた堀越謙三教授は、企画の趣旨を次のよう

に話した。「映画のクオリティだけを求めるのではなく、シナリオを理解しながら制作を進めることで互いの文化を理解し、映画制作の方法や技術、考え方の違いや共通点を実際に経験してほしいと考えた。また近い将来、日韓に限らずアジアで共同制作という形が増える予想される。なかでも日本と韓国は、メンタリテイや感性という点で共に作りやすい一番のパートナーではないかと考えた」。

シンポジウムには、安貞淑氏(韓国映画振興委員会委員長)、朴起鏞氏(韓国映画アカデミー院長)、李鳳宇氏、市山尚三氏(東京フィルムメックスプログラム・ディレクター)がパネリストとして出席。八〇年代半ば以降、固有の文化を濃厚に表現して世界的な評価を得たアジア映画にも、娯楽大作の増加、作家主義の退潮といった新たな波が訪れているという現況や、共通の文化的・歴史的背景を持つアジア各国、とりわけ日中韓の三カ国が協力して、自分たちの文化に立脚した「アジア映画」を作っていくことの重要性、さらには、国籍の違う才能がミックスされ、予期せぬものを生み出す共同制作の可能性など、「アジア映画の未来」をテーマに活発な議論が交わされた。

岡倉天心作 オペラ「白狐」 公演

十二月八日、旧東京音楽学校奏楽堂において、岡倉天心作オペラ「白狐」が上演された。

これは、創立一二〇周年にあたり、東京美術学校の創立者である岡倉天心をさまざまな角度から取り上げ、展覧会やシンポジウムなどを実施するなかで、天心唯一の戯曲であり最後の作品となった幻のオペラ「白狐」を、上野タウンアートミュージアム事業の一環として、台東区との連携により実施したものの。

当日は、オペラ「白狐」のトークセッションと上演が二回実施された。トークセッションでは、「天心とオペラ「白狐」―伝統文化と現代、日本と西洋の結び目―と題し、戸口純氏（作曲家）、清水恵美子氏（五浦美術文化研究所客員所員）、小泉晋弥氏（茨城大学教育学部教授）ら三人のパネリストを招き、日本文

学を題材に、国際的な視点で描かれた「白狐」創作への天心の思いを再考し、現代における日本の伝統や文化の在り方を検証した。

またオペラでは、これまで部分的な試演に止まっていたものを、本学教員・学生・OB、及び学外の協力者を得て、全三幕が原文のまま（日本語字幕付き）上演された。

「白狐」は、一九一三年、天心がボストン美術館の中国・日本美術部長の要職にいた際、ボストン・オペラハウスの設立記念のために、日本の信太妻伝説を基に、英語で書き上げたものの。しかし、天心の病による帰国のため、残念ながら未完成のまま上演されることはなかった。

二回にわたる公演には、合わせて約六二〇名の入場者があり、ほぼ満席の盛況のなか成功裡に終了した。

創立一二〇周年 記念音楽祭

一月四日から六日の三日間に亘り、東京藝術大学奏楽堂と旧東京音楽学校奏楽堂を中心に、「創立一二〇周年記念音楽祭」が開催された。

「藝大一二〇年をふり返って」をテーマに、新旧奏楽堂で計六回の演奏会、音楽学部で二回のシンポジウムおよび全日開催の展示&コンサートが催された。いずれも音楽学部が総力を結集した華やかな企画で、国内外で活躍する輝かしい卒業生、教員、学生ら総勢六〇〇余名が出演し、総来場者数は約四三〇〇名を数える大規模な音楽祭となった。各企画は次のとおり。

演奏会…「その時、西洋では！〜東京音楽学校創立期とその周辺のピアノ作品〜」、「日本近代音楽史に見る伝統の響き」、「日本の弦楽教育・草分けの時代」、「藝大ブラスの醍醐味・蘇るサウンド」、「黎明期の日本声楽曲」、「オーケストラ・コンサート」
「藝大一二〇年をふり返って」
レクチャー&シンポジウム…「藝大の一二〇年〜藝大はアメリカの影響から始まった」、「日本電子音楽の創成期〜藝大音響研究室の活動〜」

展示&コンサート…「日本電子音楽の創成期〜藝大音響研究室の活動〜」

音楽祭の掉尾を飾ったのは最終日のオーケストラ・コンサートで演奏された、本学が誇る指揮者（小林研一郎教授）・ソリスト陣（Sop 林康子招聘教授、Alt 伊原直子教授、Ten 吉田浩之准教授、Bar 福島明也准教授）・記念合唱団&オーケストラによるベートーヴェンの第九交響曲。名立たる出演者たちが一堂に会した大編成オーケストラとなり、その一糸乱れぬ演奏は、満員の聴衆を大きな熱狂の渦へと誘った。名実ともに歴史的な名演で幕を閉じた音楽祭であった。

開催中より出演者からの意欲的反響が大きく、また開催後には多くの来場者から賛辞を頂戴した。演奏会評でこの第九演奏が「日本の洋楽一二〇年の歴史に対する賛歌」（一月十三日『産経新聞』）と謳われたように、音楽祭は藝大の歴史を提示するに留まらず、日本における音楽教育の足跡を検証する大きな意義を果たしたといえる。

